

スタッフルーム
Staff room

アメリカの『路上』で

かわむら あきな
川村 明奈

(メディアセンター本部)

『路上』を初めて読んだのは、2005年、大学一年の時。河出書房から2007年に37年ぶりの新訳を出された、青山南先生の授業であった。横田基地が窓から見える福生で育った私は、アメリカに対してほんやりした嫌悪感を持っていたが、『路上』に魅了されてから、憧憬がそれにとって代わった。『路上』は実在の人物をモデルに書かれた小説で、著者ジャック・ケルアック自身がモデルの主人公、サル・パラダイスが、アメリカ大陸を放浪する物語である。1957年に出版されると、当時としてはかなり刺激的で自由な内容がヒッピーなどから支持を得た。

真似をしてもカッコよくない、というのはわかるが、どうしてもやってみたい。アメリカ大陸の地図にマークをしたりGoogle Mapで疑似放浪をしたりして過ごした。そろそろ行くか、となったのは、なぜか数年前のことだった。もはや大学生のような旅をすることはできない(?)ので、まずは大陸放浪ではなく、ニューヨークに行くことにした。『路上』の登場人物たちのモデル、所謂ビート・ジェネレーションの作家たちの所縁の地を巡る旅である。

2013年8月、『オン・ザ・ロード』（河出書房、2007年11月刊）、『ビート・ジェネレーション ジャック・ケルアックと旅するニューヨーク』（スペースシャワーネットワーク、2008年3月刊）を片手にまず訪れたのは、コロンビア大学である。コロンビア大学はビート・ジェネレーションの作家たちが出会った重要な地である。私は大学入学を希望する親子たちとともにキャンパスツアーに参加し、興奮しながら、ケルアックの写真と同じ場所で写真を撮り歩いた。

ニューヨークの街中でも、当時の写真に写った場所や、かつて作家たちの住んだ部屋や通ったバー、座った公園のベンチを探し、住所を頼りに歩き続けた。ガイドが出版されて5年が経過しており、元の建物がないことも多かったが、物件を探しているのかと尋ねられながら、4000枚以上の写真を夢中で撮っていた。8年越しの想いが叶い、大満足で帰国した。

大満足したはずだったが、度々写真を見返しているうち、やはり大陸を放浪してみたいという思いが湧きおこり、今度は即、よし行こうと思い立った。ニューヨークから1年、2014年8月、『地球の歩き方. アメリカ』を手に、シカゴに降り立つ。

『路上』では、ニューヨークから、途中の街

に立ち寄りつつ、西海岸へ、大陸横断の旅が繰り広げられる。自由気ままに車を飛ばすイメージを胸に抱いていたものの、社会人の放浪できる日数には限りがある。そもそも車の運転もできず、(一応)女一人旅であるため、公共の交通機関を使い、大陸縦断とすることにした。それでもとにかく、大陸を自分の目で見ながら移動できることには違いなかった。

初めての移動は、シカゴからクリーブランドへ。グレイハウンドという長距離バスを利用した。この計画を告げると、アメリカ人の友人は口々に、国内線は安いし早い、飛行機にして、バスなどやめておけ、と言うし、調べても治安の悪そうな情報ばかりが目についたが、如何せん安いし、飛行機では車窓の楽しみがない。少々心細かったものの、やはり利用することにしたのだった。

バスは大した理由も告げず、いつも数時間遅れた。車内はエアコンで極寒である。「寒い?」とドライバーが聞くと「イエース!」「ノー!」と大きな返事があったが、冷房が弱められることはなかった。携帯電話や大声の会話で盛り上がる人、突然別のグループの会話に入る人、私が気の毒に見えたのか、お菓子や毛布、お金までいろいろとくれる人、マクドナルドのシェイクをフレンチフライのソース代わりにしている人。そんな人たちを眺めていると、飽きることはなかった。以前は治安が良くなかったようだが、現在は見るからにかなりの屈強さを誇るドライバーがしっかり管理していて、危険な感じはない。アメリカの路上、人々の日常と田舎を観察するにはお勧めである。

車窓から見るアメリカの郊外は、玉蜀黍や綿花、小麦畑がどこまでも広がり、時々通る小さな町の風景は、街を旅しただけでは味わえない、たくさんの物語を想像させる。細部を書けないのが残念である。

長距離列車であるアムトラックも利用して、ピッツバーグ、メンフィスに立ち寄り、遂に南端ニューオーリンズで、『路上』のサル・パラダイスもその目で見ると望んでいたミシシッピ川を見たときは、嬉しくて、つい笑ってしまった(南部の陽気とアルコールのせいかもしれない)。

さて今回は、この冬、『アレン・ギンズバーグと旅するサンフランシスコ』（ブルース・インターアクションズ、2010年8月刊）を片手に、またうろうろと放浪する予定である。